

ゆるやかに死んでいく

登場人物

拓也

由美

男

男が、公衆電話に向かって誰かと話をしている。

話している途中からある女（由美）が入ってくる。女にとってここは自分の部屋。

由美は部屋でくつろいでいる。

男

もしもし。もしもし。悠子。聞こえてるか？…分かんねえな…

もう6年か。あの時はえらいことになってたけどね、ようやく、瓦礫もなくなった。昔みたいに戻ってるわけではないけどね、うん。

…そっちでは、勉強してんのかな？勉強とかあんのかな？わからんな。そっちに行ったことないからな、うん。

友達作れよ？お前無口だからな、無口が美德だと思ったら大間違いだからな。ちゃんと話さなきゃ、友達は作れないぞ…

…何話そうか…いや、やっぱりちゃんと考えてくればよかった。思いつかんわ…

…悠子、今どこにいるんだ。なんだか、悠子が近くにいるような気がするんだよ。

…勘違いかな？お父さん勘違いよくするからな〜ごめんな。

女は携帯電話を取り出して、男の声をぶった切るようにしゃべりだす。

男

おい、悠子…どこにいるんだ…お前が死んでから…

由美

もしもし

男は由美の声をきっかけに口をつぐむ。そして静かに受話器を置く。

由美

もしもし？あのさ…もしもし？…あ、そっか、ごめん。はい、はい。

由美は電話を切る。

男は歩き始める。ぶつぶつと何かをつぶやきながら首を横に振り、歩き続ける。

違う男（拓也）が入ってくる。拓也にとっては自分の部屋。

ガチャって開けて数歩歩きながら携帯を取り出し、電話をかける。

由美が着信に気付き、すぐさま応答する。

男はゆっくりと、ひたすら歩いている。

由美 もしもし

拓也 もしもし

由美 もしもし

拓也 聞こえる？

由美 うん、聞こえる

拓也 お疲れ

由美 お疲れ

拓也 明日発表？

由美 発表し

拓也 緊張してる？

由美 別に緊張は

拓也 絶対緊張してるだろ

由美 えく？いやでもさ、教授に脅しかけてんの

拓也 香坂？

由美 そう、香坂

拓也 うそ、香坂ゆるくないん？

由美 「今年はふるいにかけていくんで、気を付けてください」って。

拓也 香坂？

由美 いきなり言われたんだよ？

拓也 香坂だろ？大丈夫だよ

由美 そうかな

拓也 準備間に合ってるんだろ？

由美 準備は出来てるけどさ…何言われるか分からないから

拓也 ふーん

由美 こわいわくって思って

拓也 ふーん

由美 今緊張してる

拓也 早っ

由美 ふふっ…拓也がいてくれたら安心だけど

拓也 何？

由美 え？…何でもない

拓也 …？

由美 …結構会えないね

拓也 え、まあ、こんなもんなんじゃない？遠距離って

由美 …会いたいくせに

拓也 いや会いたいくせに…まあこんなもんでしょ。俺東京だし。そっち広島だし

由美 …いや分かってるけどさ

拓也 …なに

由美 いや、いやまあ全然、大丈夫だよ

拓也 うん

由美 大丈夫だけど…次いつ会えるんだろうね、って

拓也 …来月は？

由美 来月？…あ、そうか、誕生日だよね？

拓也 うん

由美は卓上カレンダーを手にもつ

由美 あ、うん、二、二は何もない

拓也 じゃあそこで

由美 あたし行くよ？

拓也 …え、いいよ。遠いよ？

由美 いいじゃんお互い様だし。連れてってよどこか

拓也 え…俺はいいけど。

由美 じゃ、そうしよう！

拓也 …おう

由美 うん

拓也 いいの？

由美 …うん

拓也 そっか、分かった

由美 楽しみ

拓也 短い間だけど

由美 どうってことない。また会えるんだから

拓也 来月が楽しみだね

由美 ね。

拓也 ねえ

由美 え？
拓也 遠足の時、バスの中でしりとりやったでしょ？
由美 小学校4年生の時かな？
拓也 長くて、移動時間が。2時間ぐらいかかったっけ？
由美 結構長い時間やった
拓也 楽しかったな
由美 何度も「ち」で攻めてきた
拓也 …俺じゃないよ
由美 …え、じゃあ誰だっけ？
拓也 もう一人いたような…
由美 拓也、弱かったよ
拓也 え？弱くないよ
由美 弱かったよ
拓也 弱くないって
由美 テニス
拓也 …は？
由美 テニス、ほら、ス
拓也 スーツ
由美 積み木
拓也 機械
由美 インターネット
拓也 トローチ
由美 ち…あ、悠子だ

男、立ち止まって由美の方を向く

由美 …え？何？
拓也 悠子。一緒に遊んでたじゃん
由美 悠子？
拓也 そうだよ
由美 ああ、なんとなく、なんとなく覚えてるかも…
拓也 小学校卒業したあと引っ越したんだよね
由美 どこ行ったんだろ
拓也 どこ行ったんだらうね

男、再び歩き始める。

由美 あのみ
拓也 ん？
由美 思い出した
拓也 ん？
由美 拓也が悠子が好きってことを相談されたこと
拓也 …え、そうだったっけ？
由美 そう、あたし覚えてる。校庭の隅のキンモクセイの隣
拓也 …覚えてない
由美 うそ、めっちゃめっちゃお願いされたもん。覚えてるよ
拓也 そうだったっけ？
由美 そうだったよ
拓也 覚えてないな
由美 うそ
拓也 …どこにいるんだろ、あいつ
由美 どこにいるんだろうね。お母さんに聞いてみたら分かるかも
拓也 あ、そうだね。俺も母さんに聞いてみる
由美 会ってみたいね
拓也 …うん
由美 疲れてない？
拓也 …別に
由美 なんだその間は？
拓也 いや、ホントに、普通よ、普通
由美 ホント？
拓也 うん
由美 ホントかな？…
拓也 由美だって疲れてるだろ？
由美 まあね
拓也 まあ今日は
由美 そうね。拓也と話せてすっきりした
拓也 それはよかった
由美 またね、誕生日、楽しみ
拓也 うん、ガイドは任せて
由美 お、了解です。
拓也 ほしいじゃ
由美 じゃあね

拓也
：じゃあね

由美と拓也、お互いに電話を切る。

由美だけ立ち上がり、観客に話を始める。

拓也は自分の部屋でテレビを見たり、立ち上がって着替えたり、何か飲み物を
ついでりしている。

男は歩き回ったまま。

由美
私の誕生日は、9月11日です…そう、アメリカで同時多発テロが起こった日です。

飛行機が大きなビルに突っ込んでいく映像を印象的に覚えてます。

8歳の誕生日。その日の夜はいつもと同じ、たくさんのごちそう、ケンタッキーを
買ってきて、あとちょっと高めのお寿司5人前と、バスデーケーキ。いつもだれ
かの誕生日の時はこういう食事なんです。全部そろえて、家族みんな揃って、ロー
ソクに火をつける。で、電気を消して…

♪ハッピーバースデートゥーユー、ハッピーバースデートゥーユー、ハッピーバー
スデーディア由美ちゃん！

由美、ローソクの火を吹き消すマネ

男はハッピーバースデーの歌が聞こえてくると、足が止まり、由美の方を向き
始める。

由美
あとは電気をつけて、ごちそうを食べて。特にサプライズは無いんですけど、いつ
も通りの幸せな時間…その後ごちそうさまをして、お風呂に入って、歯を磨いて、
さ、寝よ、っていうときにリビングからお父さんの声が聞こえて、「うわっ」って。
気になってリビングに行くと、こんな夜遅くにニュースやってて、飛行機が大きな
ビルに突っ込んでいく映像が映し出されていて、そしたらアナウンサーが、日本人
が何人犠牲になりました、って…

あの、痛ましい事件だし、悲しい事件だし。でも、何とも言えない気持ちになりま
した。

で、翌年。9月11日。9歳の誕生日。その日の夜もいつもと同じ、たくさんのご
ちそう、ケンタッキーを買ってきて、あとちょっと高めのお寿司5人前と、バス
デーケーキ。全部そろえて、家族みんな揃って、ローソクに火をつける…っていう
ときに、夕方のニュースで、

拓也
特集です。アメリカの同時多発テロから今日で、1年が経とうとしています。

由美
冷たい空気が一瞬流れて。いや、ホントにそれだけで、普通に祝ってもらって、普
通にケーキ食べて、わいわいやって、いつもの普通に楽しい誕生日になったんです

けど…ですけど、あの一瞬だけ、「あれ、今日あたしの誕生日なのかな？」って思っちゃったんです。

その年から私の誕生日は同時多発テロの日になりました…まあでも、別に、別にいいんです。いいんですけど…

拓也（モブ…家族）、由美の方を振り向く

拓也 ♪ハッピーバースデイトゥーユー、ハッピーバースデイトゥーユー、ハッピーバースデイトゥーユー、ハッピーバースデイトゥーユー。

由美 気まずい

男 ハッピーバースデイ、トゥーユー…

拓也は拍手をしたり、クラッカーを飛ばすフリ。「パンツ！パンツ！」と口で効果音。男は途中までつぶやくように歌う。そしてたたずんでいる。

由美 気まずいです…いやでも、そんなにでもないかな…

拓也 一ノ関

場所は変わって岩手・一ノ関駅。

男は由美・拓也からそっぽを向く

由美 一ノ関…東北初めて

拓也 俺も

由美 え、大丈夫なの？

拓也 大丈夫、ナビは任せて

由美 車？

拓也 そう、レンタカーで行く

男 すみません、ちょっとお時間よろしいですか？

男、二人の方を向きなおす。

男はテレビの人。インタビュアー。隣にはカメラマン

ぐるぐると、べたべたと、二人の周りをまわる。

拓也 あ、はい。

男 東京テレビの「大木誠の深層ジャーナル」っていう番組なんですけれども今東日本大震災について（カメラを指して）街頭インタビューを行っています。ご協力してい

ただけないでしょうか？数分で終わりますんで。
拓也 あ：大丈夫です。
男 ありがとうございます。お二人は岩手のご出身ですか？
拓也 あ、いや、僕東京で、こっちが広島なんです。
男 そうなんですか。今日って震災が起ってから丸6年になるんですけどご存知ですよ？
拓也 あ、はい、知ってます
男 東日本大震災が起こった時は何されてましたか？
拓也 ああ：
男 (テレビの方を指して) こっち、カメラ。
二人 ……
男 あ、じゃあそちらの女性がいいですね
由美 え、あ、はい。
男 どちらにいたんですか？
由美 教室です。学生だったので。
男 具体的には何をされてたんですか？
由美 具体的にですか？…
男 例えばどういう授業を受けていたんですか？
由美 えっと、歴史の小テスト受けてました。
男 初めて知ったのはいつですか？
由美 初めて知ったのは：終礼の時だったと思います。
男 それは担任の先生から？
由美 はい、そうです。
男 では震災当時の映像は家に帰って初めて見たんですか？
由美 ……そうですね、家に帰ってからですね。
男 その時の具体的に家の様子とかは？
由美 え：家帰ったらいつもお母さんが「おかえり」って返事するんですけど、その時は返事しなくて。リビングに入るとお母さんがいて、お母さんがテレビにくぎ付けになっていて、で私もテレビを見て…ああ、って…で怖くなって、「チャンネル変えて」って言ったんですけど、「全部これだよ？」…って言われたのは、覚えてます。はい。
男 はいありがとうございますじゃあそちらの方
拓也 あ、はい。
男 その時何をされました？
拓也 あ、僕ですか？その時は…あんまり、覚えてないですね
男 ホントに些細なことでもいいんですけどどうですかね？
拓也 ……いや、覚えてないですね、はい。ごめんなさい。

男 あ、全然、大丈夫ですよ。ありがとうございます。：（カメラマンと小声で相談）

いい？いいか、うん。質問以上です。今の映像をもしかしたら今日の夜の番組に使わせてもらうかもしれないんですけど、大丈夫ですかね？

拓也 あ、はい、大丈夫です。

男 お時間いただきましてありがとうございます。

拓也 ありがとうございます。

間

由美 どうしようか？

拓也 とりあえず、海見に行こう

由美 陸前高田、だっけ？

拓也 そうそうそう

由美 ていうかさ、ホントに海観れるの？

拓也 え、大丈夫でしょ？沿岸でしょ？

由美 工事とかやってないの？

拓也 え、別に海は観れるでしょ

由美 まあ、そうかな？

インタビュアー（男）がパンと叩き、中央にくる。

二人は、その周りを歩く。

男 もともと広島出身なんですよね。でも、俺の仕事の都合で11年前に東北に引っ越

して来たんです。ちょうど娘が中学にあがるタイミングでした……悠子っていうんです。悠子が生まれてすぐに妻は死にました。出産中に脳出血を起こしたんです。

だから悠子は俺一人で育てました……いつも二人でした。お互いが誕生日の時は、いつも仕事を早く切り上げて、一緒に祝うんです。稼ぎの少ない俺らはイチゴのショートケーキを2つ。それにろうそくを1本立てて、チャッカマンで火をつけて、電気を消して、ハッピーバースデーを、悠子が歌うんです。俺は恥ずかしいからね、どっちが誕生日でも悠子が歌うんです……♪ハッピーバースデイトゥーユー、ハッピーバースデイトゥーユー、ハッピーバースデイトゥーユー。誕生日を迎えた方がろうそくの火を吹き消すんです。本当はホールのケーキとか買ってきてね、もうちょっと豪華に祝ってやりたいんですけどね。あいつが嫌がるんです、「もったいない」って……一度はホールのケーキで祝ってやりたかったですけど……確か、高校2年の冬ですよ

間

男 18歳は祝えなかったんですよね…祝えなかったんです。

由美 インタビュー、長かったね

拓也 だな…

由美 拓也、あの時誕生日だったんだもんね…

拓也 …え、気まずい？

由美 え、いや別に、気まずくないよ

間

「間」に耐え切れなくなって、拓也は立ち止まる。

拓也 …え、なにになに？

由美 え？

拓也 気にしてる？

由美 別に

拓也 あれだよ、全然気にしてないよ？

由美 いや分かってるよ

拓也 大丈夫だから

由美 あ、でもあれだよ、あたしも分かるよ。誕生日、6月11日だから…

拓也 いやいやいや

由美 …え？

拓也 …いや、俺別に気にしてないから

由美 …ホント？

拓也 いやホントホントホント

由美 …

拓也 …ホント

由美 …

拓也 …ホントだって！

由美 …

拓也 え、何？

由美 (ちよつと笑いをこらえる様子で)…レンタカー

拓也 …あ、うん、レンタカー

男 …たまに、電話するんですね。あいつ携帯持ってたんで、電話するんですけど、つながないです…波にさらわれちゃったから…でもこの海の向こうに、悠子と通じてると思って、電話するんです…これは…忘れたくないんでしょうか。

拓也 忘れたかったんだけど

男 だって忘れたら、悠子が、死んでしまったようなー
拓也 仮病してたんだよね

口をつぐんで、男はまた、周りを歩き始める。

二人は車の中。

助手席に由美、運転席に拓也

由美 あ、覚えてる。メールしてきたもんね。部活行きたくないって。

拓也 そうそう：家にこもって寝てた

由美 ふふふ、寝てんじゃねえよ

拓也 いや、学校行きづらくなってき：震災が起こったのが、2年生の終わりだな。もうそんな昔か。ちょうど俺の誕生日で。仮病で家にいたんだよね。昼過ぎにちょうどリビング降りてテレビ見てたら：震災のニュースが流れて、東北めちゃめちゃ揺れてんじゃない！って。そのあと津波の映像だよね。すごかったあの：なんていうの：ザバーって町に津波が流れ込んでくる感じ

由美 バシャーみたいだね

男 津波はそんなものじゃない

拓也 ：その時、なんでそう思ったか忘れたけど、俺、「後悔したくない」って思ったんだよね。こんな絶望的な状況を見て、こうなってしまふ瞬間が、自分にもいつかやってくるかもしれない、今頑張らないでどうするんだ俺、って。

由美 その日は学校来なかったけどね

拓也 次の日からちゃんと来たじゃん

由美 まあ不登校じゃなくなっただけ、同じ大学に合格したしね。

拓也 変な言い方だけど、震災に救われたというかー

男 どれだけ救われなかった命があると思ってるんだよ。お前らわかってんのかよ：って、新聞やテレビなどの報道を見たり、聞いたりして、年々震災のことも言わなくなっただけ、正直思うことがあるんです。忘れたいのか？って。でも、その場になかった人はわからないですよ、実際にどれだけ、どれだけひどい目に遭ってんのか。仕方ないことなんですけど、そういうの見ちゃうと、たまに：イラッ、ってしちゃうんですよね：忘れたくても忘れられない人だっているのにさ、3月11日になって都合よく思い出して追悼だなんてやってるやつらが正直：どうかな、っておもって：悠子だったらこういう時、俺のことよく知ってるから、落ち着きな、って言うってなだめるんだろ。とにかく、東北にいる人はみんな、忘れる気はないし、忘れちゃいけないって思ってるから。温度差が、いやになるんですよ：3月11日は、陸前高田の沿岸の方にいきます。高校とか、昔家があったところとか、行くん

ですけど、一番最後には沿岸って決めてるんです：イオンのスーパーセンターまでタクシーかバスで行って、そこから2、30分歩いて沿岸まで出るんです：もちろん海は見えないですけど：悠子が良そうな気がするんですよ。

男、拓也(タクシードライバー)

スツールをタクシーに見立てて座る

男 : 陸前高田の方に

拓也 陸前高田？結構遠いね

男 昔住んでたんで

拓也 あ、そう。まあとりあえず行こうか

運転を始めるタクシードライバー

拓也 あなたもしかして、幽霊じゃないよね？

男 : え？

拓也 いやさ、テレビでよくやるようなあの、心霊現象って言うの？震災直後によくあったわけさ、こちら辺。

男 いや：

拓也 冗談冗談。最近は無いけどね。

男 :

男、外を眺める

拓也 チリ地震のこと、知ってるかね？

男 なんとなくは

拓也 ああ、あんまり聞かないかい？

男 : 11年前に広島からこっちに引っ越してきたものですから：

拓也 あ、そうだったの。あの、俺が昔小学生のころはチリ地震ってのがあってね、その地震の津波が来たわけ。俺のところは大船渡っていう漁師町だったの。津波が来る前にね、引き潮になったわけさ。そしたら勘づくわけさ、津波が来るって。それで漁師連中が慌ててサイレンを鳴らすわけさ。それを聞いてだね、俺んちも隣近所も慌てて飛び出してくるわけさ。そしたら水がじわじわこっちの地面まで流れてきて、「津波だ！」つつつてね、高台に避難したわけさ。じきに5、6メートルの津波が来てね、全部ダァって流されてしまっただけ：今とは違って国から援助なんて無いし、むしろ「海の近くに住むのがいけないんだ」って言われてね、そりゃ大変だったよ。

うん：あの、私ね、京都の大学の学者先生を乗せたことがあったわけさ。縄文時代の貝塚巡りをしてるって言って、聞いたら、津波の来ないところに貝塚があったんだってね。1000年前の人は分かってたわけさ、海の怖さを。でも俺たちは海の怖さを忘れてたんだね。少しづつ、少しづつ、忘れていったわけさ：陸前高田？

男

拓也　：陸前高田？

男　　：あ、はい

拓也　あれだよ、陸前高田の方だったらマンションの4階5階ぐらいまで津波が来たんだよね。

男

拓也　いや、大変だよ。全部流れていったから

男　　：あの時仕事だったんですよね

拓也　ああ、そう。仕事はどちらで？

男

一ノ関の方で。設会社の事務をやっていましたね：ダーって揺れたとき、職場も偉いことになったし、家もどうかとは思ったんですが：娘がね、一番心配だったんですよ。陸前高田の高校だったものですからね。結局、家もなくなって、娘もね：どうやら、逃げ遅れたみたいだね：

拓也

：ああ、娘さん、乗せたことあるよ

男

：はい？

拓也

ああ娘さんってあんたのとか知らないけど：震災から1年ぐらいたった時にね、制服を着た女の子がね、こっち向いて手を挙げてんの。んで停めて乗せたら「お父さんのところまで」って。どこ？って言っても聞かないからとりあえず走らせたわけさ。で、海岸から遠ざかって内陸の方に向かっていく途中に、その子が「おじさん、ありがとうね」って言ったもんだから、何？ってバックミラーを見たら、その子、いなかったんだよ：無賃乗車だけだね。いや困ったよ、調子よくなかったからさ：

男

あの

拓也

はい、なんです？すみませんね自分ばかりしゃべってしまっ

男

：止めてください

拓也

え、まだ陸前高田じゃないよここ？

タクシーを停止させる

男

あの：ありがとうございます

拓也

：ああ、はいはい、どうも、しゃべりすぎたね、ごめんね…

タクシーを出る男。ふらふらと歩きまわる。
拓也と由美、沿岸までたどり着く

拓也 ここだよね：海見えないね：（遠くの堤防を手で表現しながら）壁になってて
由美 …うん
拓也 こう、なあって：海、がね、その先がね、見えたらよかったけど：
由美 …（堰を切ったように笑い始める）
拓也 …え、何々？
由美 …ふふふ：海見えないんかい！（爆笑しながら）
拓也 この向こうに行ったら見えるかもしれないけど…この先が…
由美 人が歩くスペース無いよね、この先
拓也 …なんだよ！見えろよ！海見えろよ！海観て悦に浸らせろよもつと！
由美 …（爆笑）やばい、ツボった
拓也 …ちよつと俺らスゴイ不謹慎
由美 え、うん、ふふふ…

男と二人、対面する

男 …
由美 あ、ごめんなさい…
男 こんにちは
由美 …こんにちは
男 …見えないですよね
拓也 そうなんですよね、見えないんですよ…
男 …この人じゃない？
拓也 あ、そうなんです
男 …こちら辺に来るまで大変だったでしょ？移動手段が無くて
拓也 いや、まあ車があるんで。大丈夫ですよ
男 …頼もしいですね
二人 …

間

由美 …かえろっか
拓也 そうだね

由美 すみません、ありがとうございました。
男 あ、いえいえ

二人、沿岸から離れる。
男はとどまって遠くを眺めている。

由美 : 誰か、ご家族を亡くされたのかな？

拓也 そうなのかな？

由美 かなあ？

拓也 : 海、無理か。

由美 無理でしょ。

拓也 帰るか

由美 うん、帰ろう。アタシはもうおなかいっぱい

拓也 : あのさ。トイレって近くにある？

由美 え？（後ろを指して）さっきファミマあったよ？

拓也 え、うん？

由美 行こうか

拓也 うん、やばい、行こう

由美 うん、ファミマね、うん

二人、ある程度歩いて自然に散っていく。

落ち着いた場所がまた、二人の部屋になる。

男、ある程度歩いて、電話の前に行きつく。

男 もしもし。もしもーし。悠子。聞こえてるか？…久しぶりだな。

元気にしてるのか？俺は元気だよ。なんとかやってる。

悠子：もうここにいないのかな？というか、どこにもいないのか？

：あのな悠子，お父さんな，そろそろ震災のことを忘れようと思う。

：そして悠子，お父さんな，お前のことをゆるやかに忘れようと思う。ゆるやかに。

忘れないよ。忘れないけど，ゆるやかに忘れ始めようと思う。

お前は，死んでしまったんだな…

由美 :…もしもし

男 :…もしもし？…

拓也 :…もしもし

由美 :…もしもし

拓也 :…もしもーし

由美　もしもし

男は、もしもしを繰り返す。

拓也　久しぶり

由美　久しぶり

拓也　どうした？

由美　ん？いや、最近話してないな。と思って。

拓也　話してないね

由美　ね

拓也　ん？

由美　…忘れてる？

拓也　え？

由美　今日は私の誕生日だよ

男　じゃあな…

電話を切る男

二人の会話が続いていく中少しずつ暗転していく

拓也　ああ、うん、そうだよ。覚えてるよ

由美　…忘れてたでしょ

拓也　…ごめん

由美　ほらやっぱり忘れてる〜

拓也　ごめんって…

男はたたずむ。

二人は会話を続けている。

幕